

タイトル	アカデミアの奥深さと狭さと
著者	宝利，尚一
引用	北海学園大学人文論集，39：3-4
発行日	2008-03-00

アカデミアの奥深さと狭さと

宝 利 尚 一

ラテン語でアカデミア，英仏独語でアカデミーはプラトンが創設した学園，アカデメイアに由来する。「学者の世界」のことである。また，アカデミズムは大学などでの理論を重視し，学問，芸術の純粹性，正当性を守ろうとする立場で，アカデミアの奥深さを示している。しかし同時にアカデミズムは，学問，芸術の保守的，形式主義的，権威主義的傾向をも意味する。官学風とも言う。(大辞泉)

アカデミアであるべき日本の大学は国際的な地位の低下，学生数の減少などによって危機を迎えている。米エール大学の浜田宏一教授は「日本の学問を輸入学問から脱却させるためには，皆が知の仲介者となろうとする態度をやめ，知の創造者になることを目指さなければならない」と主張する。浜田氏の批判は，高山博著「ハード・アカデミズムの時代」(講談社)から引用した。明治時代以来，今も日本に根強く残る「輸入学問」の伝統は，欧米の書物を読み，その内容を効率的に紹介すれば「学者」になれたという伝統である。そうした「学者」の多くは国際的に評価される研究業績をあげたわけではない。言い換えれば，日本の大学には国際的な研究業績を上げる「学者」が少なく，形式主義的，権威主義的な教員が多い。つまり「知の創造者」でなく「知の仲介者」がほとんどだ，というのである。

アカデミアのもう一つの危機は大学の基本的機能である，専門知識を学部学生，大学院生に効率的に伝える教員の能力が低下しているのではないか，という点である。教育のプロなのに「何を言っているか分らない」「マンネリ化した授業が面白くない」「大学院生を“効率的に”指導できない」「学部と大学院の一体化にも，大学改革にも極めて消極的な」教員がいるからだ。高山氏によると，アメリカでは専門知識のない学生に必要な知識を

身につけさせるのは教授の義務であり、教授は常に授業を改善し、最新の情報を盛り込むよう、強く求められるという。

日本の大学でも、独善的な学問至上主義を排し、現実社会の情報を得たうえで、学生にそれぞれの専門知識を身につけさせる必要がある。本学でも地方自治体、一般企業などと協力した実践講座が設けられている。経営学部では「産学連携特別講座」を開設し、学生と一般人が「開かれた学びの場」で共に学んでいる。私はジャーナリストの経験を生かして8年間、本学でメディア論などの知識と実践活動を学生に伝えてきた。私はアカデミズムとジャーナリズムの融合、つまり理論と実践の関わりを伝えることで学生を刺激し、学生の関心を高めることができると考えている。

しかし、メディア論の専任教員は後任候補を教授会で決定できなかったため、1年間空白となる。開講すべき演習も開講できない。学生に対して「アンフェア」である。結果的に学部学生、大学院生が不利益をこうむることになる。外からの風が入りにくいアカデミアの形式主義的、官学的な狭量さのためではないと信じたいが……。

高山氏の提唱するハード・アカデミズムは「新しい知を作り出す創造的行為」で、社会集団への新しい情報の提供である。これに対応するソフト・アカデミズムは「柔らかくてやさしいアカデミズム」で、すでに存在する知を人々に分かりやすく伝え、教授する態度、つまり「知の伝承活動」である、という。少数の「知の創造者」には特別の待遇を与え、大部分の教授には教育面での義務を強め、学生、院生の学習、研究環境を改善するため大学組織内の「雑務」に積極的に関与させる。それが大学の個性化、差別化につながると見る。

高山氏は5年間学んだエール大学大学院で最優秀中世史博士論文賞を受賞し、その後国際学会や専門の研究分野で活躍する「知の創造者」である。かなり以前に高山氏から個人的に贈られた「ハード・アカデミズムの時代」を読み直し、改めて強い刺激を受けた。